

現在、とうしん美濃陶芸美術館では、東濃信用金庫創業100周年記念事業「美濃陶芸6人の人間国宝展・加藤孝造展」を開催しています。美濃にかかわりのある重要無形文化財保持者、いわゆる人間国宝の陶芸家の作品を、2022年の1年間をかけて1人2カ月ずつ紹介しています。「志野・瀬戸黒」荒川豊蔵、「色絵磁器」の加藤土師萌、「白磁・青白磁」の塚本快示、「志野」鈴木藏、「三彩」加藤卓男、そして最後6人目が「瀬戸黒」の加藤孝造です。加藤孝造先生は、19

素描

美濃陶芸6人の人間国宝

とうしん美濃陶芸美術館 上席学芸員 與語小津恵

35年瑞浪市生まれ。洋画家の伊藤鎗一や彫刻家の市之瀬廣太の影響を受け、1954年19歳で、日展洋画において初入選、当時の最年少での入選でした。その後、21歳で描いた「皮ヲハガサレタ牛首」は、表現に対する考え方が変わってきた時期で、絵具と筆でキャンバスに向かうと跳ね返ってくるような感覚だったと言います。そんな時、ろくろに向かった孝造先生は、粘土が上へ上へと伸びていく感覚が、自分の表現も外へ向かって広がっていくように感じたそうです。

洋画へ進むべきか思い悩んでいた時、孝造先生を説得したのは、岐阜県陶磁器試験場の場長であった五代加藤幸兵衛でした。「美しいものを作りたいければ美濃には良い材料があるじゃないか」とアドバイスされ、美濃に生まれたからこそできる表現を追求していくことと陶芸の道へと進む決心をします。

日展初入選作の「昼下がりに」から今年制作の「瀬戸黒茶盃」まで65点ほどを展示しています。作者の追求した世界をぜひご鑑賞ください。12月25日まで。入館無料。